

山地ツアーの魅力とフロントデイレイラー

山 本 秀 男

「峠」という存在ほど最近の私を強くひきつけるものはない。NCTCの双輪旅行でも今号は峠の特集をやっているのだから、峠への魅力は私個人のものではなく、多くのサイクリストに共通する問題かも知れない。

峠が文化の交流に、また経済的な重要さといった面に、更に昔にさかのぼって歴史的な背景に、実にさまざまな内容を持つていることは、山を歩く人々の中では相当に知られているようだし、研究もされていると思う。そういうことは教え



東北ツアーにて筆者

て載せたいと思つてはいるが、峠のもついろいろな意義を別としても、やはり峠に大きくひきつけられるのである。

私は北アルプスとか南アルプスという高い山は知らない。もつぱら低い山を歩いた。大菩薩とか、雲取とか、鼻曲とかが印象に強い程度であつて、一人息子である故もあつたが、ケーブルカーのあるところとか、ハイキングコースとして有名で、たとえば神津牧場のように女の人でもいかれる山ばかりを許されて歩いたのである。いきたい所がたたくさん残されて

いる。これが自転車に乗るようになつてからは、あ

たかも引ずり降されたように低い所ばかりを歩く(走り)

ることになつてしまつたのである。だから、山へゆ

きたいという気持はますます強くなる。私は扁平足である。だから立つてゐることに弱い。むしろ歩くほうがましである。しかし何といつても自転車が一番楽だし、たのしい。その自転車のつて高い所へいきたい。この願望が私を峠にひきよせる理由になつてゐると思う。そういうながらも峠をたたくさん自転車ですつてはいない。塩尻峠、鳥居峠、ヤビツ峠、関山峠、大垂水、正丸峠、山伏峠、これは峠ではないが道了山などが主なところである。籠坂峠にもいきたいし、道志川もさかのほりたいと思うし、ほかにもいきたいところがたたくさんある。

それにしても、私がかく峠にひきつけられるのは、やはり可能性を信ずるからにはかならない。軽快車に変速ギヤをつけただけで峠をのぼろうというには、年をとつてしまつてゐる。年といつても満

で三十三になろうとしてゐるのだから東京を歩いている限り非常に若いと信じているし、今でもお嬢さんを世話しようという人がいる程若い顔をしてゐる。しかし自分でよくわかるが、今では五十二枚

のチェンホイールをどうしても踏む気になれないし、四十八枚でもロードがかかりすぎるような気がする。十代のときは実用車に四十八枚のチェンホイールと十四枚の固定ギヤで踏んでいたし、つい昨年までは三光舎のレーシングタイプ、フロント五〇と四七。マルチプルフリーのステプロケットは十四、十六、十八、二十という組合せで乗つていたのである。それでも昨年夏にはローの二〇を二十二に替えた。勿論いまでも踏めぬことはない。ただ歯を喰いしばつて峠にのぼりたくないというのが本音である。つまりそういう面ですポーツマンとして年をとつたのだと思う。或は横着になつたのかも知れない。

今にして思えば前記三光舎のレーシングタイプのものでよく雪の塩尻峠へ登つたし、鳥居峠を登つた。鳥居峠などはクランクを止まらないように努力するだけで精一杯だつたといつて差支えないほど苦しい登りだつた。またヤビツ峠は四六のチェンホイールでマルチプルフリーのステプロケットは十五、十七、二十一、二十四の試作品を使つて登つた。これは大部案だつたが、札掛で廿四枚のステプロケットが他の三枚と離れ離れになり使用不能になつた。やむなく二十一で登つたが決して風景を楽しむどころのさわぎではなかつた。ギヤ比でみると、鳥居峠が六一・一、ヤビツ峠の前半が四・九八、後半が五六・九である。勿論、強い人はこ

れでも登るが誰でも登れるというギヤ比ではないと思う。

昨年の機械貿易会館の展示会で丸石の自転車についていたダブルチェーンホイールに魅力を感じたのも、かかる次第で至極当然だつたわけである。詳しく覚えていないが十四枚か十六枚落しになつて

私と一緒に走つてゐるTCA理事の今井氏がこれをつけた。東京駅名店街の展示会には製品が展示されパンフレットがつかれ価格が明示された。A型二、六〇〇円、B型二、〇〇〇円である。大変嬉しく思つた。

私が関東ギヤのB型ダブルチェーンホイ

り登りはじめてから全段使用した。一二五CCのバイクでも操縦が一寸まづいと故障するといふ峠を疲れずに登ることができた。変速とはスピードを落すものなりといふことをしみじみと味つたほどである。このときのフロント・デイレー

ーはサンツアーで各店街の展示場の終了

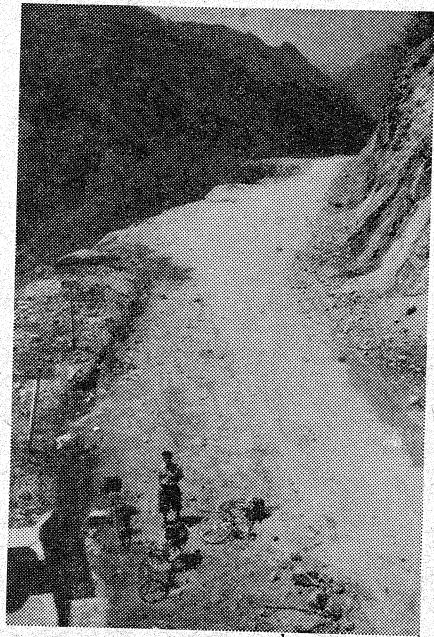
峠にも入つていきたくない。勿論費用と時間のいることだからいつ実行できるかはわからないが、山地ツアーへの魅力はますます強まつてゐる。もう扁平足の足だけを頼りにして山へいくことは断念できさうだ。

筆を擱こうとしたらNCTCの山田鉞

れでも登るが誰でも登れるというギャビ
ではないと思う。

昨年の機械貿易会館の展示会で丸石の
自転車についていたダブルチェンホイ
ルに魅力を感じたのも、かかる次第で至
極当然だったわけである。詳しく覚えてい
ないが十四枚か十六枚落しになっていた
と思う。しかし私の使っていたデイレイ
ラーがフロントとダブルチェンホイール
及びクイック
レリーズ付き
で一万円を越
えるという時
代である。魅
力は魅力だが
そのまま三光
舎へ問合せる
勇気をもたな
かった。その
後の一年間と
いうものはサ
イクリストに

とつて目まぐるしいほどにサイクリング
用の新製品の輩出した時だったが、光風
サイクリングクラブの岡村氏が関東ギャ
にダブルチェンホイールを作ってもらった
のを昨年八月頃みせてもらった。彼も鳥
居峠では難渋した組なので身にこたえて
作ってもらったと思うが、ひどく目方の
重いものであったし、不体裁なものであ
った。それが同じ関東ギャで軽くてよい
ものが量産されるようになった。いつも



関山峠の頂上

私と一緒に走っているTCA理事の今井
氏がこれをつけた。東京駅名店街の展示
会には製品が展示されパンフレットがお
かれ価格が明示された。A型二、六〇〇
円、B型二、〇〇〇円である。大変嬉し
く思った。

私が関東ギャのB型ダブルチェンホイ
ルをつけたのは関山峠へいく直前であ
る。四六枚と三三枚である。マルチプル
フリーのスプロケットが十六、十九、廿
三であるからローに落とすと、ギャ比は三
六・一になる。その次が小ギャとスプロ
ケット十九で四三・七、次が大ギャとス
プロケット廿三で四九・八、次が小ギャ
とスプロケット十六で五二・〇、次が大
ギャとスプロケット十九で六二・九、最
後はトップで七四・七である。関山峠で
はこのレシオが充分に活用できたことは
いうまでもない。天童から関山街道に入

つてしまっ
たのである。だ
から、山へゆ

いるし、今でもお嫁さんを世話しようと
いう人がいる程若い顔をしている。しか
し自分でよくわかるが、今では五十二枚

り登りはじめてから全段使用した。一二
五CCのバイクでも操縦が一寸まずいと
故障するという峠を疲れずに登ることが
できた。変速とはスピードを落すものな
りということをしみじみと味つたほどで
ある。このときのフロント・デイレーラ

ーはサンツアーで各店街の展示場の終了
後そのまま持つてきて取つた試作品で
ある。両方とも私を満足させたが、欠点
もあつた。チェンホイールは帰着後気付
いたことだがクランクをチェンホイールに
かした部分のメッキの悪さである。こ
れはメカニク的な問題でないので走行に
は差支えないが、そこだけ赤さびになら
ぬよう至急手配して欲しいと思つた。デ
イレーラーのほうは引棒が長すぎて、四
六へ上げるときが骨だつた。勿論私の背
の低いことにも原因はある。

かく註文をつけつゝも、この装備をも
つて以来、峠への魅力はさらに強くなつ
てきた。私は思う。ツアーの楽しみにお
ける峠の占める位置は大きいし、適当な
装備をした自転車なら年令を問わずに楽
に登ることは楽な話である。歯を喰いし
ばる走り方よりも楽な走り方を考える世
代の人々には勿論、合理的なツアーをし
たい人々にも是非ダブルチェンホイールと
フロントデイレーラーをすすめたい。身
長一五一cm、体重五〇・一kgの筆者がど
こへでも足をのばせるといふのは、新し
い部品の恩恵によるものと考えている。
今後は飛躍にもいつてみたいし、庄川

決して風景を楽しむところのさきびでは
なかつた。ギャビでみると、鳥居峠が六
一・一、ヤビツ峠の前半が四・九八、後
半が五六・九である。勿論、強い人はこ

峠にも入つていきたい。勿論費用と時間
のいることだからいつ実行できるかはわ
からないが、山地ツアーへの魅力はます
ます強まっている。もう扁平足の足だけ
を頼りにして山へいくことは断念できそ
うだ。

筆を擱こうとしたらNCTCの山田鉞
雄氏からダブルチェンホイールについて電
話がかかつてきた。関東ギャのダブルチ
ェンホイールの改造をした、というのであ
る。チェンホイールの歯は先端を両面とも
面取りにしてある。これはチェンをデイ
レーラさせるに不利な条件であるという
考えからヤスリで先端の面のとつてある
部分をスリ落し、しかるのち、三光舎の
マルチプルフリーのスプロケットのよう
に歯の先端に三角ヤスリで溝を入れたそ
うである。これで早速テストしたら、フ
ロントデイレーラーの取付の調子を多少許
容度をもたせても、素晴しく気持よくチ
ェンは脱線移動するという結果を得たと
いう。そこで早速電話でこういうわけだ
と話があつたのである。早速山田氏を訪
ねて実物拝見、しこうして試乗してみたい
と思つている。

それにしてもこういう話は初めてなの
で私としてはこれに見習えという断定は
しがたい。幸にして斯の道の権威者にも
メーカーにも意見を求めるに便利な立場
にいるので、山田氏の体験につきいろいろ
なる人の意見を集めて早速次号にでも報
告したいと思つている。